

社会科学系院生による 量的・質的研究法 ビギナー講習会



ダイジェストでお届け！

第1部 量的研究のいろは

講師：ラーニング・アドバイザー 人間総合科学研究科 KANAI

1/26(月)に開催された「社会科学系院生による量的・質的研究法ビギナー講習会」第1部の内容を、講師の金井さんにダイジェストでまとめてもらいました。研究の方法論や数理統計学の専門的な内容ではなく、実際に量的手法を用いながら研究を行うユーザーの立場から皆さんにお話してくれました。

今回「第一部 量的研究のいろは」を担当しました金井です。今回のセミナーは（１）本セミナーの開催経緯、（２）調査票作りの基本的注意点、（３）統計を使うときの注意点、（４）最後に、という構成になっていました。本稿では、そのうち（２）と（３）について報告します。

社会科学系の量的研究では様々な手法がとられますが、その中でも調査票を用いた検討はメジャーな手法であると考えられます。そこで本セミナーでは、調査票作りの注意点として、「回答者が答えられない項目はない方が無難」、「調査票の限界を知っておくこと」という２点をお話しました。私が特に強調したいのは「調査票の限界」です。どんなことでも調査票で測定できると考えるのは間違いでしょう。調査票に対する過信は禁物です。調査票を用いた研究をする人こそ、調査票研究の限界・弱点・欠点を知っておくべきだと思います。

また、集めたデータには必ずといってよいほど、統計的处理を施します（ここでの「統計的处理」はサンプルにおける平均値の算出など、いわゆる「記述統計」を含みます）。統計を使う際の注意点もたくさんありますが、私は当日、「しっかりデータを見てほしい」という一点を強調して伝えました。データをしっかり見ないと、分析結果の解釈を間違えかねません。例えば、勉強時間とテストの点数という２つの変数が、私たちの日常的な考えに反して負の相関を示したとします。私たちはこの結果に対して、何かしらの解釈をしますが、結果が意味することが１つとは限りません。もしかすると、図１のようにたくさん勉強した学生ほどテストで低い点数をとっていたという単純な関係があるのではなく、

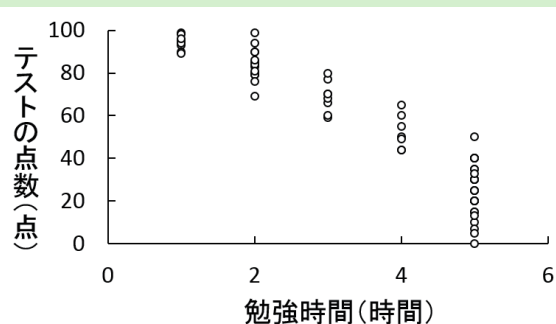


図 1. 散布図の例 1.

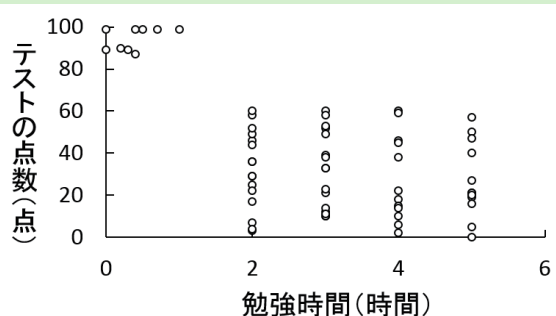


図 2. 散布図の例 2.



図2のように大半の学生は勉強時間の長さに関係なく0点から60点くらいの点数をとっていたけれど（図の右下側の人たち）、ほとんど勉強をせずに高得点をとった学生が数人いた（図の左上側の人たち）ということの意味するのかもしれませんが、これは極端な例であり、実際にこんなデータが得られることは稀かもしれませんが、このような例を用いてしっかりデータを見ることの重要性をお話しました。また、本来適切な分析手法はデータの形に合わせて選ばれるべきです。そういった意味でも、分析をする際にしっかりデータを見ることは極めて重要なことです。

今回のセミナーは「ビギナー」を対象としていましたので、あえて難しい話をせず、初歩的・簡単な話でまとめました。少しでも皆さんの参考に、もしくは学びのモチベーションになっていれば幸いです。最後に、セミナーでも紹介したオススメ文献を紹介したいと思います。附属図書館にも所蔵されておりますので、興味のある方はぜひ手にとってみてください。

量的・質的手法両方について解説あり

Punch, K. F. (1998). Introduction to social research: Quantitative and qualitative approaches. California: SAGE Publications.

（パンチ, K. F. 川合隆男（監訳）（2005）. 社会調査入門—量的調査と質的調査の活用 慶應義塾大学出版会）

図書館職員 M さんから・初学者におすすめ

原純輔・浅川達人（2009）. 社会調査 放送大学教育振興会

分析手法の選び方を学びたい方へ

森 敏昭・吉田寿夫（1990）. 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房

参加者の声！

ラーニングアドバイザー IKARASHI

今回の量的研究法の講習会では、これから量的研究を始める、もしくは始めたばかりというビギナーを対象に開催されました。実際、参加して下さった方の多くは卒論や大学院の研究でこれから量的研究をはじめようと考えている方でした。こうした方々から、「分かりやすかった」「オススメ文献を読んでみたい」「自分の研究に活かしたい」という声が多く聞かれましたので、今回の講習会の目的は達成されていたように思われます。ただし、「声が聞こえづらい」「メモを取るスペースがない」といった課題も残されました。参加者からは、同様の講習会をまた開いてほしいというご意見も頂きました。

今後、ラーニング・スクエアで同様の企画を行う際には、こうした問題を解決しつつ、参加された方がもっと講習会に集中できるよう、環境づくりにも力を入れていきたいと考えています。